隠岐島前高校郷土部収録

海士町の民話から(12)

■再話・解説　酒井董美（ただよし）
（現在、出雲かんべの里館長。元隠岐島前高校郷土部顧問）

狐の変化玉

語り手…浜谷 包房さん（御波、昭和３年生まれ）

昔、ある村に大きな杉の木があり、木の根かたを川がちょろちょろ流れております。その木はとても大きく枝は向こうの山へ届いておりましたと。

その枝を伝って毎晩のように悪賢い狐がやって来て、下を通る村の人をさんざん化かして困らせました。ある人は重い荷物を持ってそこへ来ますと、狐がちゃんと牛に化けておりまして、「これに積んで、牛に背負わせなさい」と言うので、そうしますと、荷物はすっかり狐に持って行かれてしまったというような調子です。それで村の人はお寺の和尚さんに狐を退治する方法を相談しました。

「あの狐を退治する方法はないだろうか」

「よしよし、そんなら、わたしが一つ、悪狐を懲らしめてやろう」

和尚さんは、小さい船を作り、杉の木のそばの小川の草むらへ隠しておきました。そして丸い手まりほどの石を捜し、それに岸辺でさんざん泥を塗りたくりました。

－もう狐が出そうなものだが－と思っていますと、例の狐がザワザワと葉の音をさせながら杉の木から降りてきて聞きました。

「和尚さん、何をしてござる」

「これは変化玉といってな、わたしの寺では先祖代々大事にしとった玉だ。このごろこれを盗もうという話が伝わったので、わしゃわざっと、この川で汚らけて持っていなあと思っとる」

「和尚さん、わしの変化玉は七変化だが、おまえのはなんぼだ」

「わしのは八変化だ」

「はてな、本当に八つも変化られっだらあか。そんなら変化やっこをしてみようだないか」

和尚さんは言いました。

「よし、おまえから先にしてみい」

「おお、何に化けっだ」

「まずはめでたい七福神に化けよ」

「よしきた」。　狐が宙返りを一つしますと、恵比寿さん、大黒さん、布袋さんと出て、最後に美しい弁天さんになりました。和尚さんは、

「そっで、おまえ、種切れか」

「そら、七変化で後はあれせん」

「わしのはもう一つ、七福神の乗る船に化けられる」。和尚さんが糸で縛って船を隠しておいた草むらにその石を投げて、引っ張りますと船がぞろぞろ出てきました。

さあ、狐がそれを見て変化玉がほしくてならなくなったげな。

「なんと和尚さん、頼みがあっだいど。その玉とわれが玉と替えてもらわれんだらか」

「いや、バカなことを言うな。代々の和尚さんが大事にしていたこれはやられの」

「そこを何とか、ごさんだらあか」

「おまえ、寺の宝がなあなってだめだ」

「われが今まで溜めた金と宝を全部つけてやっけん」

－よしよし、ここで一つ替えてやろう－。こう思った和尚さんは言いました。

「そんなら、交換してやる」

そこで手に手を取り合って交換したとたん、和尚さんは狐からもらった玉を石に投げつけ、粉々にしてしまいました。そして、金と宝は袋に入れて持ち帰ろうとしますと、狐は、

「和尚よ。おまえがなんぼ持って行こうとしても、わしがちょっと化けてそれを取り上げてみせる」と言います。

「それなら取ってみい」。和尚さんが答えますと狐は、

「大蛇になれ」とやってみましたけど、何にも変わることはできません。それで狐はとうとう泣き泣き山へ帰って行ったということです。（昭和51年5月29日）

《聞き手…萩坂　昇、大島廣志、大上朋美、池田百合香、浜谷深希、酒井董美》

■絵：福本隆男（崎出身、三郷市在住イラストレーター）

【解説】関 敬吾『日本昔話大成』でこの話の戸籍を調べると、本格昔話「人と狐」の中の「八化け頭巾」に当てはまるようである。浜谷さんの闊達な語りで楽しんでいただきたい。